



シェイクハンド

第40号
H26.1

～静岡県訪問看護ステーション協議会便り～

なやみは半分、よろこび倍増

さあ みんなで手をつなごう!!



迎春

新年のご挨拶

静岡県訪問看護ステーション協議会

会長 望月 律子

2014年が始まりました。訪問看護ステーション協議会の会長に就任させていただき、訪問看護の重要性を改めて実感しています。超高齢社会に描かれている地域住民の幸福な生活の実現に向け、訪問看護ステーションの機能強化や多職種連携等、地域のニーズに応える体制整備の年になりそうです。協議会のネットワークの力を益々發揮していきましょう。



副会長 篠原 彰

新年明けましておめでとうございます。静岡県訪問看護ステーション協議会も、平成25年度は望月看護協会会長を新会長にお迎えしました。

この数年伸び悩んでいたステーションの数も大幅に増加し、最古参のひとりとなった協議会幹部として今後の活動が楽しみになってまいりました。しかしながら、財政事業は大変厳しく、新年度も静岡県医師会在宅支援事業から少しでも多くの支援が出来るよう頑張ります。



副会長 上野 桂子

明けましておめでとうございます。静岡県訪問看護ステーション協議会が法人化し、無事新しい年を迎えることができたのは、ひとえに会員の

皆様のおかげと感謝いたしております。今年の報酬改定の重点課題では、訪問看護ステーションの機能、大規模化の推進が掲げられ、ますます訪問看護は在宅医療の中心的役割を担うと期待されています。本年もよろしくお願い致します。



「管理者研修報告」

訪問看護ステーションエイム 横田 佳苗

1. テーマ：「ステーションの経営・衛生要因を
整え、離職を防止する」
2. 講師：株式会社 ラピオン
山の上ナースステーション
代表取締役 訪問看護認定看護師
柴田三奈子氏
3. 開催日：平成25年8月24日（土）
4. 場所：静岡県男女共同参画センター
あざれあ 大会議室

5. 参加者：34名

起業・人材管理・経営戦略という言葉を知ると私たち管理者は難しい表情になってしまいます。組織からは経営の安定と顧客増員、人材の確保・サービスの質の向上に対し、管理者はその裁量を迫られます。

片や現場では、人員不足ながらも在宅生活や在宅医療の受け入れが急増加、訪問看護への期待が高まり業務に追われ追われているのも現実です。今や訪問看護師不足と離職は、介護・医療保険制度上、社会問題であると言っても過言ではありません。

今回の研修では柴田氏の起業の思いから事業成功への秘訣、そしてグループワークでは柴田氏をとっても身近に感じながらお話を聴くことができました。日頃は管理者が集まり経営について話しをする機会など殆どありません。研修では互いが深く重く感じる問題を提議し、これを理解しようと熱心に向かい合いました。

柴田氏は経営者のビジョンが明確であり「まずは独自の基本理念と基本方針を理解・納得・共感して頂いたうえで採用ということに重点を置く」と話します。癌末期や医療依存度の高い方への訪問看護を追求し先駆的な訪問看護事業を実践する、地域における信頼を獲得しブランドとしての地位を確立す

る、安定した経営ができる組織作りなど、経営者が常にビジョンを描き続ける事で職員のモチベーションを保ち、内発的動機づけによるマネジメント（自らの意思で主体的に目標を立て目的に向かって行動を起こさせるようにする）を行い、職員全員が同じ目標に向かっていくことが事業成功への秘訣だと私たちに伝えられました。

訪問看護師の離職理由には精神的・身体的負担や緊急電話当番の負担・待遇面への不満等がありますが、退職する人は決して訪問看護が嫌になったわけではないのです。採用後の取り組み・負担の軽減などの確かな人材管理・人材育成が離職を防止するので。人材が増えていくには①ステーションの特徴を明確にしている事②認定看護師の存在（教育体制への期待）③働きやすい環境を整備している事④働きに見合った報酬がある事（年俸制の導入）⑤仕事にやりがい・楽しさ・満足感がある事⑥大規模化することで個の負担が少なくなる⑦そして「社長の人柄かも！！」とお話しされました。

満足が得られる要因を管理者がキャッチし個性を生かしつつも方向性を見失わないよう誘導し、またベンチャー企業的な議論を繰り返すこと、これが柴田氏の現在の大規模化に至った経営戦略であるとの事でした。

管理者が揺らげば職員も揺らぐ（不安になる）、働く人は会社の宝物、質を上げるのも下げるのも、信頼を得るのも失うのもすべて人材にかかっている。職員が気持ちよく・元気に・前向きに仕事をするためにどうすればよいのか常に考えて行動する必要があると、改めて「事業成功の秘訣は人材にかかっている」と私たち管理者は痛感した研修となりました。

「中部支部研修の報告」

訪問看護ステーションふじえだ 原木 志げり

1. テーマ：「在宅医療を支える正しい救急の利用方法」
2. 講師：静岡県立総合病院
救命救急センター医長
登坂 直規氏
静岡県石田消防署 救急隊 村松氏
3. 開催日：平成25年10月19日（土）
4. 場所：静岡県立大学短期大学部 講堂
5. 参加者：95名

昨年10月19日、静岡県立大学短期大学部において、第1回中部支部研修会が開催されました。今回は、救急医療の立場から在宅にむけて、静岡県立総合病院、救命救急センター、登坂直規先生の講演でした。

患者の搬送から治療、医療機器、例えば高気圧酸素治療装置、加温ハイフロー輸液ポンプ、脳低体温療法体温管理システム、経皮的心肺補助装置等につ



いて、また平成25年7月1日から始動している救命救急センターについての説明も聞く事ができました。

石田消防署、救急隊の村松さんからは、緊急の対応が必要な症状・処置のポイント等についてのお話があり、今後の在宅での緊急処置の参考になりました。

救急と在宅の関わりについては、“救急の場でよく論じられること”としてお話され、改めて救急搬送されるということの意味を理解したように思います。主に来院時には治療方針が明確ではなく、医療側と患者側の方針の食い違いがみられるとのこと。私達の現場でもこれはよくみられるケースでもあります。特に終末期の場合、病状や今後予測される症状やそれについての対処などについて、医療者側は説明したと思っても、実際のところ患者や家族には伝わっておらず、しっかりと意思決定されないまま救急車で搬送されるケースも少なくないように思い

ます。このようなことをできるだけ少なくしていくためには、私達関わっているケース、特に在宅看取りの場合には、在宅スタッフはその時々の患者や家族の思いに寄り添うこと。また私達訪問看護師は患者の一番身近にいる医療者として、最期まで自宅で家族と共に生活できるように支えていくことが、今後の救急医療との関係を考える上でも重要であることを改めて確認しました。

また、やむを得ず救急搬送になった場合も医療情報を出来るだけの確にタイムリーに伝えていくことがスムーズな救急医療につながり、それが早期の退院と在宅療養への移行となります。

今回この研修を受け、訪問看護師として、在宅医療者としての自分の立場と看護を再確認することができました。今後の訪問看護に生かしていきたいと思っています。

訪問看護師就業セミナー実施報告

今年で4年目になる「訪問看護師就業セミナー」は、静岡県の委託事業として、訪問看護師を確保するために、東部・中部・西部の各地区で開催しています。

参加者が年々減少しているために、今年は、少しでも参加しやすいように開催場所を各地区2ヶ所に増やし、合計6ヶ所で実施しました。県・市町の広報やチラシの掲示・配布等を行いました。地区によって参加人数に大きな差が見られました。中部地区は残念ながら2ヶ所を合わせても3人と少なかったのですが、西部は13名、東部は16名、県全体で32名と昨年の実績20名を大きく上回りました。なぜ中部地区の参加者が少なかったのかについては、きちんと分析する必要があります。

各地区2会場が妥当なのか、選択した地区が妥当なのか、開催曜日はどうか等検討課題はいくつもあります。1回でも多く開催するに越したことはありませんが、予算や担当人員、他の委託事業の関連等、制約条件も多くあり、思うようにはいかない現状もあります。

「どうしたら訪問看護に関心をもってもらえるか」と、「どうしたら就業セミナーに参加しやすいか」を次年度も考えて計画していきたいと思っています。

チラシ掲示・配布等、次年度もご協力をよろしくお願い致します。

最後に、セミナー受講後に実施しましたアンケートの結果をご紹介します。参加動機は「以前から興味があった」「今後訪問看護をやろうと思って」など、訪問看護へ関心があったが最も多く、次いで「病院以外の勤務を考えて」等の転職先、或いは再就職先の選択肢の1つとして、訪問看護の実際を知るための参加でした。

受講後の感想は、「不安なことも多くあるが、これから勉強していこうと思った」「ブランクがあっても、未経験でも大丈夫だという点が安心できた」「病院ではなかなか見られない、自宅での患者さんの生き生きした表情がとても印象的だった」などで、全員が大変参考になったと回答しています。

就業が確定した人は、12月2日現在で5名です。

(事務局 鈴木)



ステーション紹介

東部 訪問看護ステーション花時計

手老 美智子

土肥の訪問看護ステーション花時計です。平成16年4月開所し、早10年が経とうとしています。当ステーション立ち上げ前4年間は訪問看護ステーションなかいずの戸田サテライトとして訪問活動していました。利用者様も増え、地域のニーズも高くなり平成16年にステーションを現在の土肥に立ち上げました。名前の由来は土肥松原公園にあります“世界一の花時計”からいただきました。

訪問エリアは伊豆市土肥地区を中心に、沼津市戸田地区、西伊豆町宇久須・安良里地区で伊豆西海岸を南北に走り回っています。この3地区はそれぞれの市町の中でも特に高齢化率の高い地区で、80名近い利用者様の年代も65歳以上が95%を占めています。

通勤時の船原峠越えでは毎日のように狸の死骸、訪問先への移動中では鹿や猪との遭遇も珍しくありません。そんな地域を看護師3名、PT 1名（♀）、他ステーションとの兼務OT 1名（♂：週2日）で訪問しています。地域性豊かな土地柄でご利用者様やご家族は皆様、穏やかな方ばかりです。介護予防の病状観察からターミナルケアまで利用者様に見合った内容を親身になって提供しています。ターミナル期では場合によって、大量皮下輸液も実施しています。リハビリの要望も多く、リハスタッフは元より看護師もしっかりとリハビリを行えるのが当ス



テーションの目玉です。

この地区には他のステーションがありませんので、どのような状態の方でも訪問看護が必要ならば受け入れます。ただ、利用者様の高齢化もさることながら、スタッフの高齢化も進行しつつあり、今後は若い力！地元の力！を充実したいところです。

また今日も海に沈む真っ赤な夕日を眺めながら1日が終わろうとしています。

明日も利用者様からの「来てくれると安心するわ。」「この次は〇日ね。」のお声をいただきながら頑張ります。

次はふれあい上野山訪問看護ステーションさんです。

中部 訪問看護ステーション大岩

中村 友子

新年あけましておめでとうございます。訪問看護ステーション大岩です。

私たちのステーションは、静岡駅から北へ車で15分～20分ほどの閑静な住宅街に位置しています。

平成24年12月1日に常勤換算2.5人でスタートし早いものでもう1年が経過しようとしています。訪問看護は初めてという看護師が多く「訪問看護とは」

や「訪問看護のしくみ」について説明したり何よりも「病院との違い」について理解してもらうのには少し時間がかかりました。また実際に訪問してみるといろいろな家庭環境があることを目の当たりにし衝撃を受け、この先訪問看護を続けられるか？悩んだスタッフもいましたがみんなでカバーしたり、見守ったり、意見交換をしたりし、何とか軌道に乗る



事が出来ました。

今後は、地域との結びつきを重視し迅速、丁寧、安心をモットーに病気や障害を持っていても家族の一員として安心して在宅生活を送ることが出来るようお手伝いし、ステーションのより強固な基盤づくりに努力していきたいと思います。

最後に紙面をお借りして開設に当たりご指導ご協力いただきました所長様方に御礼申し上げます。

次は訪問看護ステーションはあとナースさんです。



西部 天竜厚生会訪問看護ステーション

金子 規予

こんにちは、「天竜厚生会訪問看護ステーション」です。

社会福祉法人天竜厚生会の在宅事業の一つとして、平成17年7月にスタートしました。現在、所長1名、常勤看護師2名、非常勤看護師2名、理学療法士1名のスタッフで活動しています。

平成23年・24年度と厚生労働省のモデル事業「在宅医療連携拠点事業」に取り組んできました。モデル事業を通して多職種の方との顔の見える関係づくりができました。医療系サービスの少ない地域で在宅医療の支援体制づくりができるように、平成25年1月から佐久間町・水窪町の訪問を開始し、今では実施地域が浜北区、天竜区全域（春野町以外）、磐田市一部、佐久間町、水窪町と広範囲にわたったため、旧天竜市の天竜厚生会訪問看護ステーションと併せて、龍山町にサテライトを設けています。サテライトから片道1時間半かかる長野県境のお宅もあり、お弁当持ちで一日訪問することもしばしば。人も自然も豊かな土地で四季の移ろいを感じながら、気持ちよく車を走らせていますが・・・冬場には暖かいインナーと厚手のジャンパー、そしてスタッドレスタイヤが必需品となっております。

今年度になり、常勤看護師が増え、24時間対応を再開したことで、利用者数は徐々に増加し今では70名前後になりました。在宅での医療ニーズの多さを



実感している毎日です。医療機関の先生方をはじめ、ケアマネジャーの方々、地域の皆様のご期待に応えられるように、「訪問看護を利用してよかったね。」と言ってもらえるステーションを目指し頑張っています。多忙な業務に追われる日々ではありますが、健康管理をきちんとし、『楽しいから、続けられる』をモットーに、これからも安心と元気を届けられる存在でありたいと思っています。

次は、訪問看護ステーション富塚さんです。



複合型サービスの紹介

株式会社アース 訪問看護ステーションもも

統括所長 高井 由美子

利用者・家族の希望を叶えたいという思いから、H23年5月に「小規模多機能もも」を立ち上げました。しかし、小規模多機能居宅介護サービスは、医療処置は行えないという規則があり、医療依存度が高まると、在宅で暮らしたいという望みがかなわない現状がありました。そのような中、昨年、介護保険の改正で新設された複合型サービスは、利用者の医療依存度が高まっても、住み慣れた地域で継続した生活ができる、待ちに待ったサービスでした。そして、今年2月「小規模多機能もも」は、「複合型ナーシングケアもも」へとシフトさせ、静岡県下初として、なじみのスタッフによる介護と看護の一体的なサービス提供ができる、複合型サービスをスタートさせました。

複合型サービスでは、要介護と認定された利用者が、個々の状況のアセスメントに基づいて、要介護度別に一定の月額料金で「通い・泊り・訪問」のサービス提供を受けることができます。「介護者のレスパイト目的のために泊りをメインと考えている方」「毎日のリズムや活性化を重視して通いをメインにする方」「通常は在宅生活支援を中心に訪問をメインにする方」など、利用者のさまざまなニーズに対応できるのが特徴です。そして、在宅療養を困難とさせる事情をできる限りサポートし、医療依存度が高まった場合においても、本人、家族の力を最大限に引出し、自立に向けた在宅療養生活を送るためのサービスだといえます。

たとえば、肺炎を繰り返す方や、肝硬変で肝性脳

症を起こし入退院を繰り返す方が、通いのサービスで点滴を行い（医師の指示に基づき）、入院せずに済んだケース、その他、入院によって今後も継続した医療処置が必要になったものの、介護者が高齢のため、なかなか手技の習得ができず、退院後泊りのサービスを開始し、その間、介護者に出向いてもらい手技と一緒に練習し徐々に在宅生活へ移行するケースなど、複合型サービスならではの支援アプローチができます。また、現在までに4名の方を、泊りサービスを利用し、家族は通い介護をしながら、なじみの空間で、本人の望む穏やかな最期を支援することもできました。看取り後、2つの家族のヒアリングを行ったのですが、「最期は医療ではなく、生活の中で過ごすこと。医療処置は必要な時だけでいいよ。」「母は晩年寂しい、寂しいと言っていたから、寂しくない最期を迎えさせたかった。でも、1人で看取るのは大変すぎて、少し手助けがほしかった。母らしく、頑張って死ねた。ここを選んでよかった。」という言葉から、このサービスが本当に必要なサービスなのだと実感しました。

ケアとは、その人の人生や生活を支えることであり、介護・看護・医療と別々に支えることではないのだと、そう思います。利用者を主体として、ケアの専門職が一緒になって考え支援することであり、それを実現するのが複合型サービスだと考えます。今後も、介護職と看護職が一緒になって、その人の「生きる」を支えていきたいと思っています。



複合型ナーシングケアもも 外出風景 花菖蒲園へ



病院からの看護師臨地実習を受け入れて

J A 静岡厚生連

訪問看護ステーションなかいず 石井 由美

近年、国の施策として在宅医療推進の方策が明確に打ち出され、診療報酬の改定等の医療制度改革により在宅医療への後押しがされており、退院カンファレンスに参加する機会がかなり増えてきたのは喜ばしい事です。私たちは、在宅療養生活・在宅医療・訪問看護の「実態」を病棟スタッフになかなか知っていただけていないのが一番の問題だと感じています。在宅にシフトしていく時に、医療を生活のレベルで考える事が出来るのが訪問看護師です。退院時共同指導こそが在宅医療へのすり合わせ・調整の為の最重要な場だと思います。

今回、某病院から連携と在宅医療推進を目的として臨地実習の依頼があり、3人のリーダー、主任クラスの病棟看護師を受け入れました。日ごろから何とか病棟看護師とのコミュニケーションをとりたいと願っていた側として、渡りに舟のお話でした。

実習にはそれぞれ自己課題をもって臨んでくださいました。病棟看護師としては、(1)実際に家族が不安になる事は何か (2)必要となる情報は何か (3)訪問看護のシステムを学び、患者さんにアナウンスできるようにしたい (4)手術後のせん妄・認知障害を最小限にするために早期退院を促したいが在宅療養の実際と受けられるサポートの全体を理解したい、という意気込みがありました。時間の無駄がないよう、お昼をはさんで2軒ずつ訪問に同行していただきました。特に、自分の病棟から退院カンファレンスを実施して順調に在宅療養されているケースでは、家族から退院の準備から現在までの感想を聞いてもらう事が出来て良かったと思います。在宅で利用できる介護保険サービス・福祉用具・住宅改修を紹介しました。

1カ月後、研修生と退院支援委員会委員、MSW、看護師長の参加で「在宅と病院の看護連携についてのシンポジウム」が開かれ、もう1つの受け入れ先のステーションかなみさんとお招きいただきました。

3人の研修生の発表では、与えられた環境・時間・限られた資源の中でのケア、その場の状況で適切に判断する難しさ、多岐にわたる医療介護の知識、多職種との連携を捉え、今後の方向性として入院時に

生活状況の把握・アセスメントが重要である事、インフォームドコンセント後に患者家族と医療者との目標設定をする事、目標に向けて実行できるようサポート体制をとること、そのために看護師個々が退院支援について知識を深め、適切な情報を提供できるようにする、などが挙げられました。学生の時とは違い、実際に病棟業務を経験してからの実習は印象的な実体験になり、有意義だと思います。私たちステーション側からも退院連携で順調に療養できている例、準備期間や相互のコミュニケーションが不足していた例を紹介させてもらい、その後のディスカッションで相互理解を深められ、外来との連絡のタイミングや方法も教えていただく事ができました。顔が見える関係になった事だけでも良かったと思います。

これからも退院時共同指導で病院に赴く機会が増えると思います。可能なら全てのケースでその機会を設けていただき、在宅で介護しようとするご家族や療養者本人が順調に在宅療養のスタートが切れるよう、スムーズに肩の力を抜いた連携ができる関係性を作っていきたいと思います。





事務局より

あけましておめでとうございます。

今年は下記のような講演会、研修会を開催いたします。

まだ先のことはありますが、予定に入れておいて頂きたい、お知らせ致します。

今年もどうぞよろしくお願い致します。

～講演会・研修会のお知らせ～

◇在宅ケア普及啓発講演会

日 時 平成26年 3月15日（土）13時30分～15時30分

テ ー マ 「なぜ今、在宅医療なのか？」

会 場 あざれあ6階 大ホール

講 師 平原佐斗司氏（東京ふれあい医療生協梶原診療所 医師）

◇全体研修会

日 時 平成26年 3月29日（土）13時30分～16時30分

テ ー マ 「診療報酬改定について」

会 場 あざれあ2階 大会議室

講 師 上野桂子氏（静岡県訪問看護ステーション協議会副会長）

◇平成26年度の総会・研修会

日 時 平成26年 6月 7日（土）

会 場 もくせい会館（静岡市葵区鷹匠）

研修テーマ・講師 未定

【シェイクハンド第39号掲載内容のお詫びと訂正】

シェイクハンド第39号、P2平成25年度静岡県訪問看護ステーション協議会役員名に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

（誤） 監事 石川 俊一 → （正） 監事 石井 俊一



新年明けまして
おめでとうございます。



皆様にとって飛躍の年で
ありますように…

シェイクハンドNo.40

2014年 1月発行

発行所 静岡県訪問看護ステーション協議会
静岡市葵区川辺町二丁目4番地の13
Tel 054-275-3339
Fax 054-275-3338
e-mail sizuokahoumonst@cy.tnc.ne.jp

発行人 上野 桂子
編集者 石井 由美（訪問看護ステーションなかいず）東部
横田 佳苗（訪問看護ステーション エイム）中部
赤堀 奈緒子（訪問看護ステーション掛川）西部